モノと情報班

天理参考館収蔵のラオス標本と天理教名古屋大教会のラオス伝道について（３）
－調査・研究成果をまとめるにあたって－

吉田裕彦（天理大学附属天理参考館）

キーワード：文化の継続　日ラオ文化交流（史）＝草の根交流（史）
天理教名古屋大教会のラオス伝道（史）＝自動車修理販売事業
商品作物の栽培事業、医療活動
食事の道具（史）＝ティプカオ他　修正と変化

Laos Collection in Tenri Univ. Sankokan Museum and Laos Misiion of Nagoya Grand　Church, Tenrikyo (3)

Hirohiko Yoshida (Tenri Univ. Sankokan Museum)

Keywords: Continuation of culture　Japanese-Laos cultural exchange
Tenrikyo Nagoya grand church's mission in Laos
Tools of meal　Revision and change

梗概

本報告では日本とラオスとの文化交流史の研究を進めるに当たり、1970 年代前後に天理教名古屋大教会が展開したラオス伝道の実態を把握し、その活動分析から見えてくる新しい視点を展望し、ラオス文化生態史分析の一助となることを目指そうとした。

名古屋大教会の活動は 30 年前にラオスで展開されていた草の根レベルの日ラオ文化交流が背景にあったことがわかってきた。日ラオ間の民間交流がその後、どのような変遷を辿ったか、名古屋大教会の場合はどうであったのかなどを調査した結果、その多くが形を変えながらも継続されているといえることが判明した。

また、３０年前に収集された食事道具からその変遷を考えようとしたところ、食事作法、食習慣の変遷にその原因を見いだすことができた。

はじめに

本報告では、表記の研究テーマの下で、これまでに国内及びラオスで実施した調査研究の成果をまとめるにあたっての方向性を考えていきたい。

ラオス現代史を考察する上で、革命期 (1975 年～ 1986 年) を挟み、その前後の時代で、人々の暮らしがどのように変化したかをモノや情報から、ラオスの文化生態史を分析していこうという試みで本研究がスタートした。筆者に課せられたテーマは 1970 年代前後に展開した天理教名古屋大教会のラオス伝道活動の実態を把握すること、およびその活動分析から見えてくる新しい視点を展望し、ラオス文化生態史分析の一助となることをめざすこと、あわせて天理参考館に収蔵するラオス標本の利活用に向けての整備作業も進めていくことであった。

2004 年度に行った２回のラオス調査（６月 29 日～７月８日、10 月 28 日～ 11 月 10 日）では天理教名古屋大教会のラオス伝道と関わる地点をたずね、記録や関係者の聞き取りから把握した約 30 年前の状況と現況にどのような移り変わりがあったのかを確認した。また、2005 年度のラオス調査（７月 30 日～８月７日）では、1970 年代にラオスと関わりを持ち、革命期にいったん帰国したものの改革・解放路線に政策を変更した 1986 年以後、再びラオスに戻り、草の根レベルで交流を続ける邦人や、革命期にもラオスに踏みとどまり、定住を続

けている邦人たちとのインタビューを通して、天理教名古屋大教会のラオス伝道の背景にあった日ラオ文化交流（草の根交流）史の一端を垣間見ることができた。

ここでは、ラオスでの調査成果と国内での聞き取り調査や記録などで得た知見から、どのような成果が導き出せるのかを考えてみたいと思っている。

その手法としては、いささか短絡的ではあるが、冒頭に掲げたキーワードを目次として活用し、今年度の調査成果をも期待しつつ、展望していくこととする。

１．日ラオ文化交流（史）＝草の根交流（史）

天理教名古屋大教会がラオスで布教活動に着手した 1968 年頃はラオス内戦のさなかであった。ラオス内戦は、1975 年にラオス人民民主共和国が成立するまで続いた。名古屋大教会は 1978 年には 10 年間におよんだ活動を休止し、全面撤退を余儀なくされている。この時期、日本とラオスとの交流、特に民間レベルでの交流はいかに進められていたのであろうか。日本では青年海外協力隊の活動が軌道に乗りだした頃で、ラオスにも相当のスタッフが送り込まれていた。また、1959 年、日本政府の戦後準賠償で調査・設計の後、日本資金で建設され、1972 年に第１期工事を終えたナムグムダムの建設工事に携わった日本人関係者、民間企業の中にも新しい市場を求め、ラオス情勢を探りにやってきたビジネスマンや一発逆転を狙った山師のような日本人もラオスに入っていた。さらに名古屋大教会と同様に、日本の宗教団体によるボランティア活動もみられた。その他、特異な事例として、アメリカ軍主導で建設された国道 13 号線建設の労働力に徴用された当時アメリカ占領下にあった沖縄の人々の存在などを上げることができる。

本研究では、名古屋大教会が行ったラオスでの伝道活動を顧みるにあたって、以上のような日本人のラオスへの関わりが複数レベルで存在した事実を解明することにより、彼らの活動意義を考えていければと思っている。

そして可能であれば、改革・解放路線に政策を変更した 1986 年以後の日ラオ文化交流＝草の根交流についてもその状況を把握したいと考えている。

革命期に日ラオ間の交流が全面的に途絶えたが、ラオス人民政府の路線変更後、その多くが復活しているように感じている。かいつまんだ調査にすぎないが、多くの事例がその形を変えながらも途絶えることなく継続していることを確認できるのではないかと推察している。

２．天理教名古屋大教会のラオス伝道（史）

ラオス内戦からラオス人民民主共和国設立にいたるラオスの混乱期に名古屋大教会は天理教の伝道活動に携わっていた。期間は 1968 年から 1978 年にかけての 10 年間におよんでいる。

伝道活動の先頭に立って指揮を執った森井敏晴大教会長（当時）の方針は、「異文化の地で伝道の場合、使命感の発動のみが前面に出て、各種の問題に適応するための対策がおろそかになりがちである。そのために言語の習得のみならず、文化や歴史、価値観の理解に勉めながら、効果的な伝道活動につなげていく」具体的には「ラオスの経済的水準、教育的水準、農業的水準、医療的水準をよく認識し、その少し上に焦点を合わせて行動に移すこと」であった。

宗教者として天理教の教えを広め、ラオス内戦で疲弊し、困窮した状況の人々を信仰的に「救済」することが最大の目的であるが、そこへ至る過程をじっくりと構築する必要があるとの考えのもと、ビエンチャン市内やその郊外で自動車修理販売事業、商品作物の栽培事業、教育支援事業に取り組んでいった。森井会長はいずれの事業も将来、ラオス伝道を進めていく上での「後援組織」となりうる「伝道拠点」にしようとの目論見であった。

ここでは、これらの三事業の実態を把握し、人物の往来や日ラオ間の文化交流としての一側面を展望したいと考えている。

また、名古屋大教会の活動とは別に 1970 年から 1976 年にかけ、天理よろづ相談所病院海外医療科が八次に亘って継続した「ラオス巡回医療隊」の医療活動も名古屋大教会のラオス伝道を側面から支援するものであった。

ラオスに対する日本の医療援助はその後もＪＩＣＡが中心となって引き継がれて今日にいたっている。その枠内で、天理教が行ったラオスでの巡回医療活動の意義についても国際医療援助の歴史や今日までの展開と併せての展望が必要と考えている。

名古屋大教会のラオスでの伝道活動は 1978 年に発令された国外退去命令を受けることとなった。10 年の期

間、朝夕の参拝の目標（めどう）とした「神実（かんざね）」をラオス人女性信者に託して全面撤退を余儀なくされたのだった。夢半ばにしてラオス伝道が潰えたかのように思われた。が、改革・解放路線に政策変更がなされて後、1998 年頃よりラオスへの入国が可能となり、「神実」が無事であることを確認した名古屋大教会は再び、ラオス、ビエンチャンの地に天理教の教えを広めるべく一粒の種をまこうとしている。

３．食事道具の変遷（史）＝ティプカオ他

筆者は昨年出版の 2004 年度報告書で、天理参考館が 1960 年代に収集した蒸籠と飯籠を兼ねるラオスの食事道具「ティプカオ」が現在、ビエンチャン周辺で用いられているティプカオに比べて一回り大きなものであった可能性があるという主旨の報告をした。また、ティプカオの器台の高さは 1960 年代のものよりも現在のものの方が低くなっていることも、床に座して食す食習慣から椅子に座って机上で食す習慣への変化に起因している可能性があることを指摘した。

30 年～ 40 年の時間の流れはラオス人の食生活にどのような変化を来したのであろうか。印象としては都市社会では大きな変化があったものの、地方社会ではほとんど変わらないというようなイメージがある。以前は手つかみで食していたのが、スプーンやフォークを使うようになっているというような変化は道具自体の変化をさすのだが、ティプカオのように道具（器具）自体は変わらないものの、その形に微妙な変化が認められるといったようなものまで千差万別であることが予想される。ラオス人の食事道具の移り変わりを押さえることにより、モノの動態的研究につなげていけると考えている。

４．まとめにかえて－修正と変化－

日ラオ文化交流史を探る上で、古くよりラオスに滞在していた邦人へのインタビューや名古屋大教会のラオスでの伝道活動の調査などから見えてきたことの一つに「文化の継続」というキーワードだった。文中では具体的に触れなかったが、名古屋大教会が事業展開した自動車修理販売事業や商品作物（サトウキビ）の栽培事業も革命期にはそのすべてを放棄させられたのにもかかわらず、現在では大手自動車企業の販売代理店営業や薬用植物の栽培事業を目指すなど形を変えながら継続していることが確認できた。

筆者が本研究で担当する分野の多くがその文化事例は継続していた、あるいは継続しつつあるといえるであろう。だが、その事例は往時の姿そのままに継続しているのではなく、「修正と変化」を加えつつ、今日にいたっているようである。

本研究では、残された時間を有効に利用して、ビエンチャンで展開された自動車修理販売事業の実態調査や日ラオ文化交流史の資料調査を東京のＪＩＣＡ本部で行うなど未調査となっている部分の補充、追跡調査を行っていければと考えている。そして、今回述べた研究成果をまとめるにあたっての方向性に沿って、逐一具体的な事例を示しながら、最終報告にまとめていく方針である。

また、本研究の最終年度には、筆者が勤務する天理参考館の企画展示室で、四年間に亘って調査収集した資料を展示し「ラオス展」（仮称）を開催できればと目論んでいる。

参考文献

菊池陽子　2003 「現代の歴史」『ラオス概説』ラオス文化研究所

森井敏晴 2002 「天理教海外伝道の一形態－伝道地ラオスとの十年－」（私家本）

吉田裕彦 2004「天理参考館収蔵のラオス標本と天理教名古屋大教会のラオス伝道について－ 1965 年～ 1978 年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡－」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 1945-2005 2003 年度報告書』 総合地球環境学研究所

吉田裕彦 2005「天理参考館収蔵のラオス標本と天理教名古屋大教会のラオス伝道について（２）－ 1965 年～ 1978 年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡－」『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 1945-2005 2004 年度報告書』 総合地球環境学研究所

Summary: By this report, I want to think about directionality on gathering up the research result that I carried out in Japan and Laos under the study theme. At first I survey the history of a cultural exchange between Japan and Laos, and Laos mission of Tenrikyo Nagoya Grand Church what kind of positioning there is in that. And I was going to aim at an expectation, a help of history of culture habits analysis of Laos for a tool of meal or a change of meal manners for a hint in rice basket tip khao which the church donated to Tenri Univ. Sankokan Museum in about 1970 in a focus. As a result, most of the field that I was in charge of continued culture of people for a period between 30 several years including times of Laos communism revolution while repeating a revision and a change without dying out and were able to confirm what I reached today.